

3. 外出の目的

外出の目的は表9に示すように、回答者別で「外出していない」は要支援では2.5%、要介護1：6.9%、2：8.6%、3：12.5%、4：28.6%、5：38.9%と、要介護度と並行して増加している。しかし最重度の要介護5でも4割弱にとどまり、残りの6割強は外出していることは注目される。

回答者別で多いのは「病院・医院への通院」で、要支援では4.3%、要介護1：10.0%、

2：8.6%、3：12.5%、4：9.5%、5：16.7%であり、それに次いで「デイケア」「デイサービス」であった。デイサービスは要介護度が高くなるとなくなり、逆にデイケアは増えるので、この両者を合計すると要支援では4.3%、要介護1：7.5%、2：14.3%、3：15.6%、4：14.3%、5：16.7%であった。

表9 外出目的—要介護度別—

	回答者別						項目別					
	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
外出していない	4名 2.5%	11名 6.9%	3名 8.6%	4名 12.5%	6名 28.6%	7名 38.9%	4名 2.5%	11名 6.9%	3名 8.6%	4名 12.5%	6名 28.6%	7名 38.9%
買い物	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	62 38.0%	42 26.3%	8 22.9%	2 6.3%	1 4.8%	2 11.1%
友人宅	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	41 25.2%	20 12.5%	2 5.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
親類宅	1 0.6%	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	37 22.7%	18 11.3%	3 8.6%	4 12.5%	0 0.0%	0 0.0%
病院・医院への通院	7 4.3%	16 10.0%	3 8.6%	4 12.5%	2 9.5%	3 16.7%	133 81.6%	111 69.4%	25 71.4%	17 53.1%	10 47.6%	6 33.3%
散歩	0 0.0%	1 0.6%	1 2.9%	1 3.1%	0 0.0%	1 5.6%	65 39.9%	40 25.0%	5 14.3%	6 18.8%	4 19.0%	4 22.2%
畑作業	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	21 12.9%	14 8.8%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	1 5.6%
仕事(通勤など)	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
趣味・スポーツのため	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	6 3.7%	4 2.5%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
老人クラブ	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 3.1%	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
地域での活動(町内会など)	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	11 6.7%	2 1.3%	2 5.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
デイサービス	3 1.8%	3 1.9%	2 5.7%	2 6.3%	0 0.0%	0 0.0%	53 32.5%	43 26.9%	11 31.4%	9 28.1%	2 9.5%	1 5.6%
デイケア	4 2.5%	9 5.6%	3 8.6%	3 9.4%	3 14.3%	3 16.7%	68 41.7%	84 52.5%	18 51.4%	15 46.9%	8 38.1%	3 16.7%
その他	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	10 6.1%	12 7.5%	2 5.7%	1 3.1%	1 4.8%	0 0.0%
複数回答	141 86.5%	119 74.4%	23 65.7%	18 56.3%	10 47.6%	4 22.2%						
返答なし	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%						
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%	516 316.6%	402 251.3%	82 234.3%	58 181.3%	32 152.4%	24 133.3%

以上はこの目的のみに外出している人々であった。すなわち、前項で要介護4・5という重度者でも4、5割は週1回以上外出しているという興味ある結果が得られたが、その多くはこのように通院あるいはデイサービス・デイケアが目的であったと考えられる。

複数回答も含めた項目別（合計は100%以上）についてみると、「病院・医院への通院」が最も多く要支援では81.6%、要介護1：69.4%、2：71.4%、3：53.1%、4：47.6%、5：33.3%、次に「デイケア」は41.7%、52.5%、51.4%、46.9%、38.1%、16.7%、「デイサービス」は32.5%、26.9%、31.4%、28.1%、9.5%、5.6%であり、上記同様に通院・通所がトップであった。

しかしその他に、「散歩」は39.9%、25.0%、14.3%、18.8%、19.0%、22.2%、「買い物」は38.0%、26.3%、22.9%、6.3%、4.8%、11.1%であり、これらの目的の外出は、要介護4・5でも行っている人があった。

しかし「友人宅」は25.2%、12.5%、5.7%、0%、0%、0%、「親類宅」は22.7%、11.3%、8.6%、12.5%、0%、0%のように、友人宅への訪問は要介護3から、また親類宅への訪問は要介護4から行わなくなった。

その他「畑作業」は12.9%、8.8%、2.9%、0%、0%、5.6%、「地域での活動（町内会など）」は6.7%、1.3%、5.7%、0%、0%、0%、「趣味・スポーツのため」は3.7%、2.5%、2.9%、0%、0%、0%、「老人クラブ」は3.1%、0.6%、0%、0%、0%、0%のように、多彩な目的の外出が限られた数の人であるが行なわれていたことは見落としてはならない。

4. 外出方法

外出の目的と関連が深いので外出の方法についてたずねた。これは「参加の具体像としての活動」の状況とみることができる。

外出方法を表10に示した。「外出していない」は要支援では2.5%、要介護1：5.6%、要介護2：8.6%、要介護3：9.4%、要介護4：23.8%、要介護5：33.3%であった。

回答者別で最も多いのは「デイケア・デイケアサービスの送迎用の車」であり、要支援では4.9%、要介護1：11.3%、2：17.1%、3：9.4%、4：14.3%、5：16.7%であり、次いで多いのが「家族の車で」で要支援では4.3%、要介護1：9.4%、2：14.3%、3：9.4%、4：14.3%、5：5.6%であった。

「歩いてく」、「公共交通機関（バス・電車）」は少なく、「タクシー」は要支援では4.9%、要介護1：3.1%、2～4：0%、5：11.1%、「電動三輪車」は要支援では0.6%、要介護1：1.9%、2：0%、3：6.3%、4・5：0%と、共に要介護度の低いものが利用していた。

「車いす」は要支援では0.6%、要介護1・2：0%、3：9.4%、4：9.5%、5：5.6%と最大でも1割に満たなかった。

複数回答も含めた項目別（合計100%以上）についてみると、最も多いのは「デイケア・デイケアサービスの送迎用の車」で、要支援では63.2%、要介護1：63.1%、要介護2：62.9%で、要介護3：65.6%、要介護4：38.1%、要介護5：22.2%あり、次に「家族の車で」が47.2%、50.0%、54.3%、46.9%、19.0%、27.8%、「タクシー」が38.7%、27.5%、20.0%、12.5%、23.8%、11.1%であった。

「歩いていく」は34.4%、20.6%、14.3%、6.3%、9.5%、5.6%、「電動三輪車」は8.6%、11.3%、2.9%、3.1%、9.5%、0%、「公共交通機関(バス・電車)」は6.7%、6.3%、2.9%、0%、0%、0%、「車を運転」は3.1%、1.3%、2.9%、0%、0%、5.6%であった。

「車いす」は1.8%、0.6%、2.9%、12.5%、19.0%、22.2%で、要介護4・5では2割前後が使用していた。

「自転車」は1.2%、1.3%、0%、0%、0%、0%、「バイク」は要支援のみで1.8%であった。

以上の外出に関する3項目(頻度、目的、方法)を総括すると、要するに要介護4・5といった重度者でも週1回以上の外出をしているものが半数近くいるが、その多くは目的は通所(デイケア)・通院がほとんどで、外出方法はデイケア等の送迎用の車あるいは家族の車がほとんどであった。

表10 外出方法—要介護度別—

	回答者別						項目別						
	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	
外出していない	4名 2.5%	9名 5.6%	3名 8.6%	3名 9.4%	5名 23.8%	6名 33.3%	4名 2.5%	9名 5.6%	3名 8.6%	3名 9.4%	5名 23.8%	6名 33.3%	
歩いていく	4 2.5%	2 1.3%	2 5.7%	1 3.1%	1 4.8%	0 0.0%	56 34.4%	33 20.6%	5 14.3%	2 6.3%	2 9.5%	1 5.6%	
車を運転	3 1.8%	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 3.1%	2 1.3%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	1 5.6%	
家族の車で	7 4.3%	15 9.4%	5 14.3%	3 9.4%	3 14.3%	1 5.6%	77 47.2%	80 50.0%	19 54.3%	15 46.9%	4 19.0%	5 27.8%	
公共交通機関 (バス・電車)	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	1 3.1%	0 0.0%	0 0.0%	11 6.7%	10 6.3%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	
タクシー	8 4.9%	5 3.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 11.1%	63 38.7%	44 27.5%	7 20.0%	4 12.5%	5 23.8%	2 11.1%	
自転車	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 1.2%	2 1.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	
バイク	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 1.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	
電動三輪車	1 0.6%	3 1.9%	0 0.0%	2 6.3%	0 0.0%	0 0.0%	14 8.6%	18 11.3%	1 2.9%	1 3.1%	2 9.5%	0 0.0%	
車いす	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	3 9.4%	2 9.5%	1 5.6%	3 1.8%	1 0.6%	1 2.9%	4 12.5%	4 19.0%	4 22.2%	
デイケア・デイケア サービスの送迎用の車	8 4.9%	18 11.3%	6 17.1%	3 9.4%	3 14.3%	3 16.7%	103 63.2%	101 63.1%	22 62.9%	21 65.6%	8 38.1%	4 22.2%	
その他	3 1.8%	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	9 5.5%	12 7.5%	1 2.9%	0 0.0%	1 4.8%	1 5.6%	
複数回答	121 74.2%	104 65.0%	19 54.3%	16 50.0%	7 33.3%	5 27.8%							
返答なし	1 0.6%	2 1.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%							
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%	350 214.7%	312 195.0%	61 174.3%	50 156.3%	31 147.6%	24 133.3%	

Ⅲ. 「参加」の状況

1. 家庭内の自分の役割

家庭中の自分の役割は表 11 に示す通りで、「特になし」は要支援では 19.0%、要介護 1 では 45.0%、要介護 2 では 68.6%、要介護 3 は 71.9%、要介護 4 は 81.0%、要介護 5 は 83.3%であった。逆にいえば要支援では約 8 割、要介護 1 で半数強、要介護 2・3 で 3 割前後が何らかの家庭内役割を果たしていることになる。要介護 4・5 でさえ 2 割弱が家庭内役割を果たしている。

回答者別で多いのは「家事（全て）」であ

り、要支援では 22.1%、要介護 1 : 6.9%、2 : 2.9%、3 : 3.1%、4 : 0%、5 : 5.6%であった。これは家事だけが役割である人である。これに「調理(自分が主だが時に手伝いあり)」、「調理（一部だけ）」、「調理以外の家事(自分が主だが時に手伝ってもらう)」、「調理以外の家事（一部だけ）」を加えた、一部でも家事に携わっている人をみると、要支援では 32.6%、要介護 1 : 15.8%、2 : 11.5%、3 : 3.1%、4 : 0.0%、5 : 5.6%であり、要介護 2 まではもっぱら家事に携わっている人が 1 割以上いた。

表 11 家庭内の自分の役割—要介護度別—

	回答者別						項目別					
	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
特になし	31名 19.0%	72名 45.0%	24名 68.6%	23名 71.9%	17名 81.0%	15名 83.3%	31名 19.0%	72名 45.0%	24名 68.6%	23名 71.9%	17名 81.0%	15名 83.3%
家事(全て)	36 22.1%	11 6.9%	1 2.9%	1 3.1%	0 0.0%	1 5.6%	48 29.4%	16 10.0%	2 5.7%	1 3.1%	0 0.0%	1 5.6%
調理(自分が主だが時に手伝いあり)	5 3.1%	4 2.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	31 19.0%	20 12.5%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
調理(一部だけ)	3 1.8%	6 3.8%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	21 12.9%	19 11.9%	2 5.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
調理以外の家事(自分が主だが時に手伝ってもらう)	5 3.1%	2 1.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	27 16.6%	17 10.6%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
調理以外の家事(一部だけ)	4 2.5%	2 1.3%	2 5.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	22 13.5%	14 8.8%	5 14.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
庭いじり	0 0.0%	3 1.9%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	33 20.2%	15 9.4%	2 5.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
家庭菜園	1 0.6%	2 1.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	21 12.9%	14 8.8%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
留守番	6 3.7%	9 5.6%	1 2.9%	7 21.9%	4 19.0%	2 11.1%	35 21.5%	26 16.3%	3 8.6%	8 25.0%	4 19.0%	2 11.4%
家族の介護	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
孫の子守	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 1.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
その他	3 1.8%	5 3.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 2.5%	7 4.4%	0 0.0%	1 3.1%	0 0.0%	0 0.0%
複数回答	69 42.3%	43 26.9%	5 14.3%	1 3.1%	0 0.0%	0 0.0%						
返答なし	0 0.0%	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%						
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%	275 168.7%	221 138.1%	41 117.1%	33 103.1%	21 100%	18 100%

複数回答も含めた項目別でみると、「家事の全てをしている」が要支援では29.4%、要介護1では10.0%、要介護2：5.7%、要介護3：3.1%、要介護4：0%、要介護5：5.6%であった。前と同様にたとえ一部でも家事をしている人（「全て」「時に手伝い」「一部だけ」「調理以外(時に手伝い)」、「調理以外(一部)」の合計）は要支援で91.4%、要介護1：53.8%、2：31.5%、3：3.1%、4：0%、5：5.6%であり、要介護2まではかなりの程度の家事を行っていた。

その他「留守番」は21.5%、16.3%、8.6%、25.0%、19.0%、11.4%、「庭いじり」は20.2%、9.4%、5.7%、0%、0%、0%、「家庭菜園」は12.9%、8.8%、2.9%、0%、0%、0%、「家族の介護」は要介護1のみで0.6%、「孫の子

守」は要支援のみで1.2%であった。

2. 仕事

仕事の状況は表12に示すように、「仕事をしたいが、していない」は要支援では32.5%、要介護：38.1%、要介護2：45.7%、要介護3：46.9%、要介護4：28.6%、要介護5：50.0%、「特に仕事をしたいと思わない」は要支援では46.0%、要介護1：41.9%、2：45.7%、3：43.8%、4：52.4%、5：22.2%であった。

両者をあわせた、仕事をしていない人は要支援では78.5%、要介護1：80.0%、2：91.4%、3：90.6%、4：81.0%、5：72.2%と、要介護度と強い関連はなく7~9割であった。

表12 仕事の状況—要介護度別—

	回答者別					
	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
仕事をしたいが、していない	53名 32.5%	61名 38.1%	16名 45.7%	15名 46.9%	6名 28.6%	9名 50.0%
特に仕事をしたいと思わない	75 46.0%	67 41.9%	16 45.7%	14 43.8%	11 52.4%	4 22.2%
農業	8 4.9%	0 0.0%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
自営業	2 1.2%	2 1.3%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
常勤の一般の仕事	2 1.2%	3 1.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
パート勤務	1 0.6%	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
ボランティア的な仕事	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
その他	14 8.6%	14 8.8%	0 0.0%	1 3.1%	2 9.5%	3 16.7%
複数回答	1 0.6%	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 5.6%
返答なし	6 3.7%	11 6.9%	1 2.9%	2 6.3%	2 9.5%	1 5.6%
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%

「農業」は要支援では4.9%、要介護1:0%、2:2.9%、3~5:0%、「自営業」は要支援では1.2%、要介護1:1.3%、2:2.9%、3~5:0%、「常勤の一般の仕事」は要支援では1.2%、要介護1:1.9%、2~5:0.0%、「パート勤務」は要支援では0.6%、要介護1:0.6%、2~5:0.0%、「ボランティア的な仕事」は要支援では0.6%、要介護1~5:0.0%であった。

このように農業が(絶対数は少ないといえ)最も多かったが、男女をとわずかなり高齢者になっても、また多少体が不自由でも続けられる仕事としての農業の意義を再確認する必要があると思われる。

3. 趣味・スポーツ

趣味・スポーツの状況は表13に示すように、「もともと興味がない」は要支援では20.2%、要介護1:25.6%、要介護2:42.9%、要介

護3:31.3%、要介護4:42.9%、要介護5:22.2%、「したいができない」は要支援では51.5%、要介護1:54.4%、2:45.7%、3:62.5%、4:42.9%、5:66.7%であった。

この2つを合計した「していない」人は要支援で71.8%、要介護1:80.0%、2:88.6%、3:93.8%、4:85.7%、5:88.9%であり、概して8割以上と多く、要介護度との関連は薄かった。

「十分にしている」は要支援では4.3%、要介護1:0.6%、2:2.9%、3:0%、4:4.8%、5:0%、「ある程度している」は要支援では23.3%、要介護1:18.8%、2:8.6%、3:6.3%、4:9.5%、5:5.6%であった。

両者を合計した「趣味・スポーツをしている」人は要支援では27.6%、要介護1:19.4%、2:11.4%、3:6.3%、4:14.3%、5:5.6%であった。

表13 趣味・スポーツについて—要介護度別—

	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
もともと興味がない	33名 20.2%	41名 25.6%	15名 42.9%	10名 31.3%	9名 42.9%	4名 22.2%
したいができない	84 51.5%	87 54.4%	16 45.7%	20 62.5%	9 42.9%	12 66.7%
十分にしている	7 4.3%	1 0.6%	1 2.9%	0 0.0%	1 4.8%	0 0.0%
ある程度している	38 23.3%	30 18.8%	3 8.6%	2 6.3%	2 9.5%	1 5.6%
返答なし	1 0.6%	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 5.6%
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%

以上「参加」についてまとめると、家事については要介護度とある程度の関連があったが、仕事、趣味・スポーツについては関連性は弱かった。これは「参加」は「活動」の状況だけで規定されるものではなく、家族や地域社会などの「環境因子」、また職業歴やライフスタイルなどの「個人因子」の影響を強く受けるものであることを考えるといわば当然である。

訪問リハビリテーションとしてはこのような「活動」の状況（要介護度）からの「参加」の「相対的独立性」を利用して、たとえ重度者であっても「参加」の向上をうながし、それによる「生活の活発化」をもって廃用症候群を克服し、「活動」の向上をはかるというアプローチを「活動向上訓練」に併用することが重要と考えられる。

IV. 「心身機能」の状況

1. 体や心の動きで不自由と感じている状況

体や心の動きで不自由と感じている状況は表 14 に示すように、「特になし」は要支援では 8.6%、要介護 1 3.1%、要介護 2 8.6%、要介護 3 3.1%、要介護 4 0%、要介護 5 5.6%と全て 1 割以下であった。逆にいえば要介護度にかかわらず 9 割以上が「心身機能」の問題をもっていた。

回答者別の単独回答で最も多いのは「足の動き」で、要支援では 27.0%、要介護 1 : 23.8%、2 : 11.4%、3 : 6.3%、4 : 9.5%、5 : 11.1%であった。また「認知症」は要支援では 2.5%、要介護 1 : 2.5%、2 : 2.9%、3 ~ 5 : 0%であった。

複数回答も含めた項目別（合計は 100%以上）でみると、まず「計」が要支援の約 180%

から要介護 4 の約 350%までにわたることから平均して 1 人で 2 - 3 個の不自由を持っていることがわかる。

個々の項目では「足の動き」が最も多く、要支援では 73.0%、要介護 1 82.5%、要介護 2 71.4%、要介護 3 84.4%、要介護 4 85.7%、要介護 5 94.4%、次に「手の動き」が 25.2%、28.1%、40.0%、50.0%、61.9%、77.8%であった。

「ものを見ること」は 25.8%、25.0%、20.0%、37.5%、19.0%、16.7%、「音を聞くこと」は 23.3%、27.5%、20.0%、18.8%、33.3%、5.6%、「認知症」は 9.2%、20.0%、31.4%、28.1%、23.8%、33.3%、「声を出して話すこと」4.9%、10.0%、11.4%、21.9%、52.4%、38.9%であった。

また「失禁」は 4.3%、15.6%、22.9%、28.1%、47.8%、33.3%、「意識障害」は 1.2%、1.9%、0%、3.1%、19.0%、16.7%であった。

2. 歩行や身の回りや家事などが不自由になったことの原因

歩行や身の回りや家事などが不自由になったことの原因は、表 15 に示すように「脳卒中」は 429 名中 80 名（18.6%）、「骨折」は 53 名（12.4%）、「病気」は 169 名（39.4%）、「その他」が 93 名（21.7%）であった。

要介護度別には「脳卒中」は要支援では 6.1%、要介護 1 22.5%、要介護 2 22.9%、要介護 3 37.5%、要介護 4 42.9%、要介護 5 27.8%と要介護 3・4 に多かった。

「骨折」は要支援では 16.0%、要介護 1 : 12.5%、2 : 8.6%、3 : 9.4%、4 : 4.8%、5 : 0.0%と要支援に多く、「病気」は要支援では 41.7%、要介護 1 : 40.6%、2 : 28.6%、

表 14 体や心の動きで不自由と感じている状況－要介護度別－

	回答者別						項目別					
	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
特になし	14名 8.6%	5名 3.1%	3名 8.6%	1名 3.1%	0名 0.0%	1名 5.6%	14名 8.6%	5名 3.1%	3名 8.6%	1名 3.1%	0名 0.0%	1名 5.6%
手の動き	5 3.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	41 25.2%	45 28.1%	14 40.0%	16 50.0%	13 61.9%	14 77.8%
足の動き	44 27.0%	38 23.8%	4 11.4%	2 6.3%	2 9.5%	2 11.1%	119 73.0%	132 82.5%	25 71.4%	27 84.4%	18 85.7%	17 94.4%
ものを見ること	5 3.1%	2 1.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	42 25.8%	40 25.0%	7 20.0%	12 37.5%	4 19.0%	3 16.7%
音を聞くこと	3 1.8%	7 4.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	38 23.3%	44 27.5%	7 20.0%	6 18.8%	7 33.3%	1 5.6%
声を出して話すこと	1 0.6%	1 0.6%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	8 4.9%	16 10.0%	4 11.4%	7 21.9%	11 52.4%	7 38.9%
意識障害	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 1.2%	3 1.9%	0 0.0%	1 3.1%	4 19.0%	3 16.7%
認知症	4 2.5%	4 2.5%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	15 9.2%	32 20.0%	11 31.4%	9 28.1%	5 23.8%	6 33.3%
失禁	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	7 4.3%	25 15.6%	8 22.9%	9 28.1%	10 47.6%	6 33.3%
その他	1 0.6%	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	1 4.8%	0 0.0%	5 3.1%	6 3.8%	1 2.9%	2 6.3%	2 9.5%	0 0.0%
複数回答	85 52.1%	101 63.1%	26 74.3%	29 90.6%	18 85.7%	15 83.3%						
返答なし	1 0.6%	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%						
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%	291 178.5%	348 217.5%	80 228.6%	90 281.3%	74 352.4%	58 322.2%

3 : 31.3%、4 : 28.6%、5 : 55.6%であった。

複数回答はあまり多くないので、それを含めた項目別にみても傾向はほぼ同様であった。

V. 「健康状態」の状況

「健康状態」(疾患・外傷、等)をみるために通院・入院歴の状況を調べた。

1. 通院の状況

医療施設への通院の状況は表 16 に示すように、「あり」は要支援では 94.5%、要介護1 87.5%、要介護2 80.0%、要介護3 71.9%、要介護4 57.1%、要介護5 66.7%であった。要介護度が進むほど減る傾向があるが、これが通院が困難になるためか、その他の要因か(制度的に往診を受けやすくなる、など)については検討の余地がある。

表 15 歩行や身の回りや家事などが不自由になったことの原因－要介護度別－

	回答者別						項目別					
	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
脳卒中	10名 6.1%	36名 22.5%	8名 22.9%	12名 37.5%	9名 42.9%	5名 27.8%	12名 7.4%	41名 25.6%	12名 34.3%	15名 46.9%	11名 52.4%	5名 27.8%
骨折	26 16.0%	20 12.5%	3 8.6%	3 9.4%	1 4.8%	0 0.0%	29 17.8%	22 13.8%	7 20.0%	3 9.4%	2 9.5%	0 0.0%
病気	68 41.7%	65 40.6%	10 28.6%	10 31.3%	6 28.6%	10 55.6%	71 43.6%	71 44.4%	13 37.1%	12 37.5%	8 38.1%	10 55.6%
その他	48 29.4%	29 18.1%	7 20.0%	4 12.5%	2 9.5%	3 16.7%	52 31.9%	32 20.0%	8 22.9%	5 15.6%	3 14.3%	3 16.7%
複数回答	6 3.7%	8 5.0%	6 17.1%	3 9.4%	3 14.3%	0 0.0%						
返答なし	5 3.1%	2 1.3%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%						
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%	164 100.6%	166 103.8%	40 114.3%	35 109.4%	24 114.3%	18 100.0%

表 16 医療施設への通院の状況－要介護度別－

	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
なし	9名 5.5%	20名 12.5%	7名 20.0%	9名 28.1%	8名 38.1%	6名 33.3%
あり	154 94.5%	140 87.5%	28 80.0%	23 71.9%	12 57.1%	12 66.7%
返答なし	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 4.8%	0 0.0%
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%

このように多くの者が通院していることから、「水際作戦」（生活機能低下の早期発見・早期対応）としての訪問リハビリテーションの立場からいえば、生活機能低下の早期発見者としての病院・診療所などの医療機関の役割は非常に重要であると考えられる。

2. これまでの入院状況

これまでの入院状況は表 17 に示すように、「なし」は要支援では 20.2%、要介護 1 19.4%、要介護 2 17.1%、要介護 3 12.5%、要介護 4 9.5%、要介護 5 11.1%、と、ほ

ば 2 割以下であり、8 割以上が入院歴を持っていた。

入院歴の内訳は「1 年以内にあり」は要支援では 30.1%、要介護 1 : 28.1%、2 : 28.6%、3 : 34.4%、4 : 23.8%、5 : 33.3%であった。

そして「5 年以内にあり」は要支援では 32.5%、要介護 1 : 34.4%、2 : 37.1%、3 : 28.1%、4 : 47.6%、5 : 38.9%、「最近 5 年はない」は要支援では 17.2%、要介護 1 : 18.1%、2 : 17.1%、3 : 25.0%、4 : 14.3%、5 : 16.7%であった。

要介護度による差は著明ではなく、ほとどの要介護度でも 3 割前後が 1 年以内に、3~4 割が 5 年以内に経験していた。

VI. 環境因子

1. 補装具等の使用状況

補装具等の状況は表 18 に示すように、「返答なし」が要支援 60.7%、要介護 1・2 で 45%~60%と多かったが、これは「使用していない」が大部分と思われる。

複数回答が多かったので項目別にみると、最も多いのは「ポータブルトイレ」で要支援では 15.3%、要介護 1 : 18.1%、2 : 22.9%、3 : 56.3%、4 : 33.3%、5 : 33.2%と要介護 3 でも最も多く、半数以上であった。要介護 4 以降はかえって少なくなり、オムツにとって代えられるようになる。

次に多いのは「補聴器」で要支援では 12.3%、要介護 1 : 11.9%、2 : 8.6%、3 : 6.3%、4 : 4.8%、5 : 0%であった。「電動三輪車」は要支援では 8.0%、要介護 1 : 8.1%、2 : 2.9%、3 : 6.3%、4 : 4.8%、「電動車いす」は要支援では 3.7%、要介護 1 : 3.8%、2 : 2.9%、3 : 9.4%、4 : 4.8%、5 : 5.6%であった。

その他「しびん」、「白杖」、「装具」、「義足」はなどがあつたが概して少なかった。

歩行能力の向上に有効な装具の使用が電動三輪車・電動車いす等に比べて少ないことは大きな問題で、今後この点の改善が必要と思われる。

表 17 これまでの入院状況—要介護度別—

	要支援	要介護 1	要介護 2	要介護 3	要介護 4	要介護 5
なし	33 名 20.2%	31 名 19.4%	6 名 17.1%	4 名 12.5%	2 名 9.5%	2 名 11.1%
1 年以内にあり	49 30.1%	45 28.1%	10 28.6%	11 34.4%	5 23.8%	6 33.3%
5 年以内にあり	53 32.5%	55 34.4%	13 37.1%	9 28.1%	10 47.6%	7 38.9%
最近 5 年間はない	28 17.2%	29 18.1%	6 17.1%	8 25.0%	3 14.3%	3 16.7%
返答なし	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 4.8%	0 0.0%
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%

表 18 補装具等の状況－要介護度別－

	回答者別						項目別					
	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
補聴器	11名 6.7%	14名 8.8%	2名 5.7%	1名 3.1%	0名 0.0%	0名 0.0%	20名 12.3%	19名 11.9%	3名 8.6%	2名 6.3%	1名 4.8%	0名 0.0%
白杖	2 1.2%	1 0.6%	0 0.0%	1 3.1%	0 0.0%	0 0.0%	5 3.1%	5 3.1%	2 5.7%	1 3.1%	0 0.0%	0 0.0%
装具	2 1.2%	3 1.9%	1 2.9%	0 0.0%	1 4.8%	0 0.0%	2 1.2%	14 8.8%	4 11.4%	2 6.3%	2 9.5%	2 11.1%
義足(切断の場合)	2 1.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 1.2%	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
義手	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
電動三輪車	9 5.5%	6 3.8%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	13 8.0%	13 8.1%	1 2.9%	2 6.3%	1 4.8%	0 0.0%
しびん	2 1.2%	2 1.3%	0 0.0%	0 0.0%	1 4.8%	0 0.0%	4 2.5%	9 5.6%	1 2.9%	5 15.6%	4 19.0%	2 11.1%
オムツ	3 1.8%	12 7.5%	3 8.6%	4 12.5%	7 33.3%	5 27.8%	8 4.9%	24 15.0%	11 31.4%	12 37.5%	12 57.1%	12 66.7%
ポータブルトイレ	14 8.6%	16 10.0%	1 2.9%	6 18.8%	1 4.8%	0 0.0%	25 15.3%	29 18.1%	8 22.9%	18 56.3%	7 33.3%	6 33.3%
電動車いす	5 3.1%	2 1.3%	0 0.0%	2 6.3%	1 4.8%	0 0.0%	6 3.7%	6 3.8%	1 2.9%	3 9.4%	1 4.8%	1 5.6%
複数回答	14 8.6%	27 16.9%	11 31.4%	14 43.8%	8 38.1%	7 38.9%						
返答なし	99 60.7%	77 48.1%	16 45.7%	4 12.5%	2 9.5%	6 33.3%						
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%	85 52.1%	120 75.0%	31 88.6%	45 140.6%	28 133.3%	23 127.8%

表 19 身体障害者手帳保有の有無－要介護度別－

	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
持っていない	118名 72.4%	103名 64.4%	16名 45.7%	21名 65.6%	10名 47.6%	4名 22.2%
持っている	44 27.0%	57 35.6%	19 54.3%	11 34.4%	11 52.4%	14 77.8%
返答なし	1 0.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%

2. 身体障害者手帳の保有状況

行政サービス関連の「環境因子」である身体障害者手帳の有無は表 19 に示すように、「持っている」は要支援では 27.0%、要介護 1 : 35.6%、2 : 54.3%、3 : 34.4%、4 : 52.4%、5 : 77.8%であり、概して重度に多い傾向があった。

全体で身体障害者手帳所持者は 429 名中 156 名 (36.4%) であった。

このように要介護認定者に身体障害者手帳所持者が多く、要介護 5 では 8 割もみられることは、介護保険関連行政と障害福祉行政とが対象者においてオーバーラップが大きいこと、したがって行政上の連携が不可欠であることを示すものといえよう。

D. 総括的考察

以上、在宅要介護認定高齢者の生活機能の現状をみると、「活動」「参加」「心身機能」のいずれについても著しい低下が認められた。その中「活動」と「心身機能」においては要介護度と並行して低下する傾向が明らかであった。一方「参加」においては要介護度との関連は著明ではなく、むしろ種々の「環境因子」「個人因子」が関与するものと考えられた。

ただ「活動」においても、要介護度が高くても小数ながら高い「活動」水準を保っているものも存在していたことは重要な点である。

また「健康状態」に関連しての現在の通院者、入院歴などは全体に高く、要介護度との関連は乏しかった。

通院者が多いことは、介護予防の「水際作戦」(生活機能低下の早期発見・早期対応)としての訪問リハビリテーションにおいて、生

活機能低下の発見者としての医療機関との連携の必要性を示すものである。

また要介護認定者に身体障害者手帳所持者が多く、全体で約 4 割、要介護 5 では 8 割に及ぶことは、介護保険行政と障害福祉行政の緊密な連携が重要であることを示していると思われる。

E. 結論

1 地方都市の在宅要介護認定高齢者の ICF にもとづく生活機能調査により、多くのものが「活動」「参加」「心身機能」に問題を有しており、概して要介護度が進むほど問題が大きくなること、しかし同時に一部には要介護度が高くても「活動」「参加」のレベルの高いものも存在することが確認された。

また「健康状態」に問題を有し、通院しているものが多いことから、訪問リハビリテーション・システムの構築に当たって一般医療との連携が重要であること、また身体障害者手帳を有するものが多いことから障害福祉行政との連携も重要であることが判明した。

以上のように、今後の訪問リハビリテーション・システムの構築のための貴重な情報が得られた。

F. 健康危険情報

特になし

在宅生活高齢者の生活機能の経時的変化

分担研究者名 大川弥生 国立長寿医療センター 生活機能賦活研究部 部長

研究要旨 訪問リハビリテーションの今後のあり方、特に介護予防における「水際作戦」（生活機能低下の早期発見・早期対応）における、自宅訪問による「活動」向上のシステム・プログラム構築の一助とすることを目的として、「活動」の「質」及び「量」の現在および1年前の状況に関する調査を、1自治体の在宅高齢者の悉皆調査として、非要介護認定者5,961名（回収率96.3%）、要介護認定者463名（回収率98.9%）について実施した。

結果として、在宅高齢者において、1年間のうちに明らかな「活動」の「質」及び「量」の低下を来たすものが少なからずあり、特に後期高齢者においてそれが著しいことが確認された。またその際、これまで重視されてこなかった「普遍的自立」から「環境限定型自立」への低下に今後特に注意を払う必要があることが明らかとなった。

これらは「水際作戦」の対象者の早期発見への手がかりとなり、また対応のあり方についても大きな示唆を与えるものである。

A. 研究目的

訪問リハビリテーションの今後のあり方として、介護予防における「水際作戦」、すなわち生活機能低下の早期発見・早期対応による生活機能再向上において、自宅訪問を行って、具体的な生活の場で、生活機能、特に「活動」に対して直接的・具体的な働きかけを行うことは重要な意義をもつ。これは、入院・入所リハビリテーションや通所・外来リハビリテーションよりもはるか

に優れた効果をあげうるものであり、訪問リハビリテーションの価値と潜在的な可能性を証明するよいチャンスとなるものと考えられる。

そのような「水際作戦」としての訪問リハビリテーションが効果をあげるためには、生活機能の僅かな低下をも敏感に検知しうるような技術・プログラムの確立とそれを支えるシステムの構築が必要である。

更にその前提として介護予防の対象とな

る高齢人口の中での生活機能の実態(静態)とその変化(動態)を正確に把握することが必要となる。

そこで生活機能のうち、特に「活動」の動態(経時的変化)、また生活不活発病と関連の深い「生活の活発さ」についての動態を把握することを目的とした。

B. 研究方法

1. 調査方法及び対象

1市の65才以上の全在宅高齢者(非要介護認定者および要介護認定者)を対象として、「活動」の「質」(自立度)としては、歩行(屋外歩行、屋内歩行)、畳や床からの立ち上がり、階段の昇り降り、立って靴下を履くについて、1年前、半年前、現在の3時点について調べた。また「活動」の「量」(生活の活発さ)として外出頻度と1日の活動量(日中どのくらいからだを動かしているか)を、1年前と現在の2時点で調べた。

1) 非要介護認定者

調査対象は、1市の65歳以上の在宅高齢者の内、非要介護認定者6,400名から入院・入所者を除く6,193名である。

調査は、郵送留め置き訪問回収により行った。

2) 要介護認定者

調査対象は、要介護度が要支援～要介護5から入院・施設入所者・住所不明者等を除いた468名である。

調査は、調査員直接面接法により行った。

2. 回収率

1) 非要介護認定者

回答は5,961名(回収率96.3%)から得た。性別不明、年齢65歳未満・不明の18名を除いた5,943名(男性2,408名、女性3,535名)を分析対象とした。このうち前期高齢者(65-74歳)は男性1,297名、女性1751名、後期高齢者(75歳～)は男性1,111名、女性1,784名であった。

2) 要介護認定者

回答は463名(回収率98.9%)から得た。65歳未満を除いた417名(男性119名、女性298名)を分析対象とした。このうち前期高齢者(65-74歳)は男性28名、女性26名、後期高齢者(75歳～)は男性91名、女性272名であった。

(倫理面の配慮)

主任研究者の所属機関の倫理委員会にて審査を受け、研究の承認を受けた。また当該自治体の個人情報保護・管理等の規則に従い、本研究について主任研究者との間で協定書を締結している。

なお対象となる被検者についてはインフォームド・コンセントの原則に立って、実施している。

C. 結果と考察

I. 「活動」の「質」(自立度)

経時的変化をみる場合には、はじめ非要介護認定であったものが生活機能低下に伴って要介護認定者になることも(またその逆も)考えなければならない。そのような変動を避け、1自治体における全住民の全体像を把握することが重要と考え、集計においては次のような方法をとった。

①非要介護認定者と要介護認定者とを分けて合計し、②生活機能の状況に年齢が大きく影響することから前期高齢者と後期高齢者とに分ける。

また大きな傾向を見るために全て1年前と現在との比較について検討することとした。

1. 屋外歩行

屋外歩行について、1年前の状況と現在の状況とを前期・後期高齢者別にクロス表で示したものが表1-1、表1-2である。

1) 前期高齢者

表1-1の前期高齢者での変化をみると、1年前に「遠くへも一人で歩いていた」（「普遍的自立」）1854名中、現在1631名（88.0%）が不変であった。そして1段階下のレベルの「近くであれば一人で歩いている」に低下したものが9.8%、2段階下の「誰かと一緒にあれば歩いている」に低下したものが1.4%、そして3段階下の「外は歩いていない」に低下したものが0.8%であり、低下者全員を合わせると11.9%、すなわち約1.2割において低下がみられた。

次に、1年前に「限定的自立」である「近くであれば一人で歩いていた」980名では、1段階上の「遠くへも一人で歩いている」に改善したものが1.8%あった。不変者は94.3%であり、一方低下した者をみると、1段階下のレベルの「誰かと一緒にあれば歩いている」に1.7%が、2段階下の「外は歩いていない」に2.0%が低下し、合計3.8%で低下がみられた。

1年前に介護歩行状態である「誰かと一緒にあれば歩いていた」であった113名についてみると、1段階上の「近くであれば

一人で歩いている」に9.7%が、2段階上の「遠くへも一人で歩いている」に3.5%が改善し、合計13.3%が改善した。不変者は68.1%であった。一方低下した者をみると、1段階下のレベルの「外は歩いていない」に18.6%が低下していた。

1年前に「外は歩いていなかった」139名をみると、1段階上の「誰かと一緒にあれば歩いている」に2.2%が、2段階上の「近くであれば一人で歩いている」に6.5%が、3段階上の「遠くへも一人で歩いている」に2.2%が改善した。合計10.8%が改善し、不変者は89.2%であった。

2) 後期高齢者

表1-2の後期高齢者での変化をみると、1年前に「遠くへも一人で歩いていた」1288名中、現在912名（70.8%）が不変であった。そして1段階下のレベルの「近くであれば一人で歩いている」に24.6%が、2段階下の「誰かと一緒にあれば歩いている」に2.5%が、そして3段階下の「外は歩いていない」に1.9%が低下し、これら低下者全員を合わせると29.0%、すなわち約3割において低下がみられた。

次に、1年前に「近くであれば一人で歩いていた」であった1439名では、1段階上の「遠くへも一人で歩いている」に改善したものが1.2%あった。不変者は89.1%であり、一方低下した者をみると、1段階下のレベルの「誰かと一緒にあれば歩いている」に4.4%が、2段階下の「外は歩いていない」に4.9%が低下し、合計9.3%で低下がみられた。

1年前に「誰かと一緒にあれば歩いていた」であった218名をみると、1段階上の

「近くであれば一人で歩いている」に 8.3%が、2段階上の「遠くへも一人で歩いている」に 1.4%が改善し、改善者の合計は 9.6%であった。不変者は 64.7%であった。一方低下した者をみると、1段階下のレベルの「外は歩いていない」に 25.7%が低下していた。

1年前に「外は歩いていなかった」297名をみると、1段階上の「誰かと一緒であれば歩いている」に 1.3%が、2段階上の「近くであれば一人で歩いている」に 1.7%が、3段階上の「遠くへも一人で歩いている」に 1.0%が改善した。合計 4.0%が改善し、不変者は 96.0%であった。

表 1-1 屋外歩行の変化－1年前との比較：前期高齢者－

1年前	調査時	遠くへも一人で歩いている	近くであれば一人で歩いている	誰かと一緒であれば歩いている	外は歩いていない	返答なし	計
遠くへも一人で歩いていた		1631名 88.0%	181名 9.8%	26名 1.4%	14名 0.8%	2名 0.1%	1854名 100%
近くであれば一人で歩いていた		18 1.8%	924 94.3%	17 1.7%	20 2.0%	1 0.1%	980 100%
誰かと一緒であれば歩いていた		4 3.5%	11 9.7%	77 68.1%	21 18.6%	0 0.0%	113 100%
外は歩いていなかった		3 2.2%	9 6.5%	3 2.2%	124 89.2%	0 0.0%	139 100%
返答なし		2 12.5%	4 25.0%	4 25.0%	1 6.3%	5 31.3%	16 100%
計		1658 53.4%	1129 36.4%	127 4.1%	180 5.8%	8 0.3%	3102 100%

表 1-2 屋外歩行の変化－1年前との比較：後期高齢者－

1年前	調査時	遠くへも一人で歩いている	近くであれば一人で歩いている	誰かと一緒であれば歩いている	外は歩いていない	返答なし	計
遠くへも一人で歩いていた		912名 70.8%	317名 24.6%	32名 2.5%	25名 1.9%	2名 0.2%	1288名 100%
近くであれば一人で歩いていた		17 1.2%	1282 89.1%	64 4.4%	70 4.9%	6 0.4%	1439 100%
誰かと一緒であれば歩いていた		3 1.4%	18 8.3%	141 64.7%	56 25.7%	0 0.0%	218 100%
外は歩いていなかった		3 1.0%	5 1.7%	4 1.3%	285 96.0%	0 0.0%	297 100%
返答なし		1 6.3%	7 43.8%	2 12.5%	2 12.5%	4 25.0%	16 100%
計		936 28.7%	1629 50.0%	243 7.5%	438 13.4%	12 0.4%	3258 100%

3) 1年間の変化のまとめ

表 1-1、1-2 の結果をもとに、1年前の自立度別に1年間の変化を低下・不変・改善の3群にまとめたものが表 1-3 である。

前期高齢者全体で 3102 名中 279 名 (9.0%) が、後期高齢者では 3258 名中 564 名 (17.3%) が低下していた。これに対し、改善した者は前期高齢者では全体で 1.5%、後期高齢者でも 1.5%であった。しかし、最も自立度の高い「遠くへも一人で歩いていた」では改善はありえないので、2番目の自立度である「近くであれば一人で歩いていた」以下を対象としてみると、前期高齢者では 1232 名中の 3.9%が、後期高齢者では 1954 名中の 2.6%が改善していた。不変者は前期高齢者では 88.8%、後期高齢者では 80.4%であった。

特に低下が著しいのは「遠くへも一人で歩いていた」と「誰かと一緒に歩いていた」であり、「遠くへも一人で歩いていた」では前期高齢者で 11.9%、後期高齢者で 29.0%と1年間に約 1-3 割が低下してお

り、「誰かと一緒に歩いていた」では前期高齢者で 18.6%、後期高齢者で 25.7%と1年間に約 2-2.5 割が低下していた。

2. 自宅内歩行

自宅内歩行について、1年前の状況と現在の状況とを前期・後期高齢者別にクロス表で示したものが表 2-1、表 2-2 である。

1) 前期高齢者

表 2-1 の前期高齢者での変化をみると、1年前に「普遍的自立」に準ずる「何もつかまらずに歩いていた」2783 名中、現在 2725 名 (97.9%) が不変であった。そして1段階下のレベルの「よく家具や壁を伝わっている」に 1.7%が、2段階下の「誰かと一緒に歩いている」に 0.2%が、3段階下の「ほとんど四つ這いなど」に 1名 (0.04%) が、そして4段階下の「ほとんどベッドや布団の上の生活」に 0.1%が低下し、これら低下者全員を合わせてみると 2.0%において低下がみられた。

表 1-3 屋外歩行の自立度の1年間の変化

1年前	前期高齢者					後期高齢者				
	低下	不変	改善	不明	計	低下	不変	改善	不明	計
遠くへも一人で歩いていた	221名 11.9%	1631名 88.0%	0名 0.0%	2名 0.1%	1854名 100%	374名 29.0%	912名 70.8%	0名 0.0%	2名 0.2%	1288名 100%
近くであれば一人で歩いていた	37 3.8%	924 94.3%	18 1.8%	1 0.1%	980 100%	134 9.3%	1282 89.1%	17 1.2%	6 0.4%	1439 100%
誰かと一緒に歩いていた	21 18.6%	77 68.1%	15 13.3%	0 0.0%	113 100%	56 25.7%	141 64.7%	21 9.6%	0 0.0%	218 100%
外は歩いていなかった	0 0.0%	124 89.2%	15 10.8%	0 0.0%	139 100%	0 0.0%	285 96.0%	12 4.0%	0 0.0%	297 100%
返答なし	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	16 100%	16 100%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	16 100%	16 100%
計	279 9.0%	2756 88.8%	48 1.5%	19 0.6%	3102 100%	564 17.3%	2620 80.4%	50 1.5%	24 0.7%	3258 100%

次に、1年前に「限定的自立」に準ずる「よく家具や壁を伝わっていた」248名では、1段階上の「何もつかまらずに歩いている」に改善したものは6.5%であった。不変者は92.7%であり、一方低下した者をみると、1段階下の「誰かと一緒に歩いている」に0.4%が、3段階下の「ほとんどベッドや布団の上の生活」に0.4%が低下し、合計0.8%で低下がみられた。

1年前に介護歩行状態である「誰かと一緒に歩いていた」であった38名をみると、1段階上の「よく家具や壁を伝わっている」に2.6%が、2段階上の「何もつかまらずに歩いている」に10.5%が改善した。合計13.2%が改善し、不変者は86.8%であった。一方低下した者はいなかった。

1年前に「ほとんど四つ這などだった」8名をみると、3段階上の「何もつかまらずに歩いている」に12.5%が改善し、普遍者は87.5%であった。

1年前に「ほとんどベッドや布団の上の生活だった」16名をみると、4段階上の「何もつかまらずに歩いている」に6.3%が改善し、不変者は93.8%であった。

2) 後期高齢者

表2-2の後期高齢者での変化をみると、1年前に「何もつかまらずに歩いていた」2415名中、現在2243名(92.9%)が不変であった。そして1段階下のレベルの「よく家具や壁を伝わっている」に6.1%が、2段階下の「誰かと一緒に歩いている」に0.4%が、3段階下の「ほとんど四つ這いなど」に0.2%が、そして4段階下の「ほとんどベッドや布団の上の生活」に0.3%が低下し、

これら低下者全員を合わせてみると7.0%において低下がみられた。

次に、1年前に「よく家具や壁を伝わっていた」653名では、1段階上の「何もつかまらずに歩いている」に改善したものは2.5%であった。不変者は93.1%であり、一方低下した者をみると、1段階下の「誰かと一緒に歩いている」に2.1%が、2段階下の「ほとんど四つ這など」に1.5%が、3段階下の「ほとんどベッドや布団の上の生活」に0.8%が低下し、合計4.4%で低下がみられた。

1年前に「誰かと一緒に歩いていた」であった98名をみると、1段階上の「よく家具や壁を伝わっている」に1.0%、2段階上の「何もつかまらずに歩いている」に3.1%が改善した。合計4.1%が改善し、不変者は84.7%であった。一方低下した者をみると、1段階下の「ほとんど四つ這など」に6.1%が、2段階下の「ほとんどベッドや布団の上の生活」に5.1%が低下し、合計11.2%で低下がみられた。

1年前に「ほとんど四つ這など」だった33名をみると、3段階上の「何もつかまらずに歩いている」に3.0%が改善した。不変者は90.9%であった。一方低下した者をみると、1段階下の「ほとんどベッドや布団の上の生活」に6.1%が低下していた。

1年前に「ほとんどベッドや布団の上の生活」だった47名をみると、3段階上の「よく家具や壁を伝わっている」に12.8%が改善し、不変者は87.2%であった。

表 2-1 自宅内歩行の変化－1年前との比較：前期高齢者－

調査時 1年前	何もつか まらずに 歩いている	よく家具 や壁を伝 わっている	誰かと一 緒に歩い ている	ほとんど 四つ這い など	ほとんど ベッドや 布団の上 の生活	返答なし	計
何もつかまらずに歩いていた	2725名 97.9%	47名 1.7%	5名 0.2%	1名 0.0%	3名 0.1%	2名 0.1%	2783名 100%
よく家具や壁を伝わっていた	16 6.5%	230 92.7%	1 0.4%	0 0.0%	1 0.4%	0 0.0%	248 100%
誰かと一緒に歩いていた	4 10.5%	1 2.6%	33 86.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	38 100%
ほとんど四つ這いなど	1 12.5%	0 0.0%	0 0.0%	7 87.5%	0 0.0%	0 0.0%	8 100%
ほとんどベッドや布団の上の生活	1 6.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	15 93.8%	0 0.0%	16 100%
返答なし	0 0.0%	1 11.1%	1 11.1%	0 0.0%	0 0.0%	7 77.8%	9 100%
計	2747 88.6%	279 9.0%	40 1.3%	8 0.3%	19 0.6%	9 0.3%	3102 100%

表 2-2 自宅内歩行の変化－1年前との比較：後期高齢者－

調査時 1年前	何もつか まらずに 歩いている	よく家具 や壁を伝 わっている	誰かと一 緒に歩い ている	ほとんど 四つ這い など	ほとんど ベッドや 布団の上 の生活	返答なし	計
何もつかまらずに歩いていた	2243名 92.9%	147名 6.1%	10名 0.4%	6名 0.2%	7名 0.3%	2名 0.1%	2415名 100%
よく家具や壁を伝わっていた	16 2.5%	608 93.1%	14 2.1%	10 1.5%	5 0.8%	0 0.0%	653 100%
誰かと一緒に歩いていた	3 3.1%	1 1.0%	83 84.7%	6 6.1%	5 5.1%	0 0.0%	98 100%
ほとんど四つ這いなど	1 3.0%	0 0.0%	0 0.0%	30 90.9%	2 6.1%	0 0.0%	33 100%
ほとんどベッドや布団の上の生活	0 0.0%	6 12.8%	0 0.0%	0 0.0%	41 87.2%	0 0.0%	47 100%
返答なし	3 25.0%	1 8.3%	0 0.0%	1 8.3%	0 0.0%	7 58.3%	12 100%
計	2266 69.6%	763 23.4%	107 3.3%	53 1.6%	60 1.8%	9 0.3%	3258 100%

3) 1年間の変化のまとめ

表2-1、2-2の結果をもとに、1年前の自立度別に1年後の変化を低下・不変・改善の3群にまとめたものが表2-3である。

前期高齢者全体で3102名中58名(1.9%)が、後期高齢者では3258名中212名(6.5%)が低下していた。これに対し、改善した者は前期高齢者では全体で0.7%、後期高齢者では全体で0.8%であった。しかし、最も自立度の高い「何もつかまらずに歩いていた」では改善はありえないので、2番目の自立度である「よく家具や壁を伝わっていた」以下を対象としてみると、前期高齢者では310名の7.4%が、後期高齢者では831名中の3.2%が改善していた。不変者は前期高齢者では97.0%、後期高齢者では92.2%であった。特に低下が目立つのは前期高齢者では「何もつかまらずに歩いていた」で2.0%が、

後期高齢者では「誰かと一緒に歩いていた」で11.2%が低下していた。

3. 畳や床からの立ち上がり

畳や床からの立ち上がりについて、1年前の状況と現在の状況とを前期・後期高齢者別にクロス表で示したものが表3-1、表3-2である。

1) 前期高齢者

表3-1の前期高齢者での変化をみると、1年前に「普遍的自立」に準ずる「不自由はなかった」2630名中、現在2527名(96.1%)が不変であった。そして1段階下のレベルの「床や家具に手をつけている」に3.5%が、2段階下の「助けてもらっている」に0.2%が、そして3段階下の「行っていない」に0.1%が低下し、これら低下者全員を合わせると3.9%において低下がみられた。

表2-3 自宅内歩行の自立度の1年間の変化

変化	前期高齢者					後期高齢者				
	低下	不変	改善	不明	計	低下	不変	改善	不明	計
1年前 何もつかまらずに歩いていた	56名 2.0%	2725名 97.9%	0名 0.0%	2名 0.1%	2783名 100%	170名 7.0%	2243名 92.9%	0名 0.0%	2名 0.1%	2415名 100%
よく家具や壁を伝わっていた	2 0.8%	230 92.7%	16 6.5%	0 0.0%	248 100%	29 4.4%	608 93.1%	16 2.5%	0 0.0%	653 100%
誰かと一緒に歩いていた	0 0.0%	33 86.8%	5 13.2%	0 0.0%	38 100%	11 11.2%	83 84.7%	4 4.1%	0 0.0%	98 100%
ほとんど四つ這いなど	0 0.0%	7 87.5%	1 12.5%	0 0.0%	8 100%	2 6.1%	30 90.9%	1 3.0%	0 0.0%	33 100%
ほとんどベッドや布団の上の生活	0 0.0%	15 93.8%	1 6.3%	0 0.0%	16 100%	0 0.0%	41 87.2%	6 12.8%	0 0.0%	47 100%
返答なし	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	9 100%	9 100%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	12 100%	12 100%
計	58 1.9%	3010 97.0%	23 0.7%	11 0.4%	3102 100%	212 6.5%	3005 92.2%	27 0.8%	14 0.4%	3258 100%